

〔4〕 しょうわ へいせい 昭和から平成へ

～港をよくする取り組みと新しいまちづくり～

1950年（昭和25年）ごろになると、日本は戦争のひ害から立ち直り、工業を中心とする各種の産業がさかんになってきました。そういう中で、1958年（昭和33年）、^{さきしま なん こう}咲洲（南港地区）をうめ立てて^{りん かい}臨海工業用地をつくる事業がスタートしました。その後、1967年（昭和42年）になって、この事業は、国内や外国との物流を取りあつかう港をつくる計画に変わりました。咲洲に続いてつくられた^{まい しま}舞洲・^{ゆめ しま ほっ こう}夢洲（北港地区）は、市民のくらしや産業活動から出されるごみなどでうめ立てられ、新しく生まれた土地の利用が工夫されてきました。

大阪港をもっと便利な港にするために、フェリーターミナル・コンテナターミナル・客船ターミナルや、鉄道・道路・橋などがつくられました。また人びとが自然に親しみ学習やスポーツを楽しめる^{し せつ こく さい}施設、国際交流の施設、いろいろな事業所、^{こう そう じゅう たく}高層の住宅、学校（小学校4校、中学校2校）（→10ページ）などができました。大阪港は、物流活動、生活、学習やレクリエーションなど、いくつかの働きを合わせ持った新しい^{ち い き}地域です。

なおとさんたちは、「大阪港は、長い年月と多くの人びとの工夫と努力で、今のようすがたになったのだ」と思いました。



（国土地理院作成）

うめ立て前の大阪港のようす（1947年（昭和22年）ごろ）



うめ立て後の大阪港のようす（現在）



ゆめまい
夢舞大橋



開橋中



さくら
南港桜小学校